

とっておきの熊野 山村の暮らし体験講座 その二十

## 『熊野の本藍染め』報告書

- 実施日：平成19年7月8日（日）→延期の為8月26日（日）
- 場所：熊野市神川町柳谷 そめやなないろ 工房
- 参加者：10名（女性7名・男性3名）
- 講師：藤本香雅氏、藤本弘二氏



当日は午後からの集合。とても暑い日でしたが参加者の皆さんも無事、熊野の山里柳谷に到着されました。早速エプロンをつける男性もおられ、気合十分。皆で工房へ移動しました。

タデ科の藍の葉を発酵させて出来る“すくも”で染める方法は世界の藍染めの中でも類を見ません。木灰や酒、石灰などで調節しながら染料を作り上げていく過程はとても根気の要る作業です。しかしそうしてできあがった美しい藍色は、日本人の肌にもとてもよく合います。この伝統技法を、神川町柳谷で本藍染めの工房をかまえておられる藤本香雅さん、弘二さんに指導していただきました。



始めに、香雅さんより本藍染めの魅力についてお話をお聞きしました。藍の花や葉、すくもを見せていただきながら、染料を作る工程や藤本さんご夫妻が本藍染めを始めたきっかけをお話下さいました。今では小数の限られた作家さんが藍染めを受け継いでいますが、昔、暮らしに欠かせなかった藍染めは、町の至る所に紺屋（染屋）があったほど日本の生活文化に深く入り込んでいたそうです。

本藍染めは皆さん初めての様でしたが、なかには藍の生葉で染物をされていて、本藍染めも体験してみたかったという方もおられました。比較的模様のつけやすい方法を教わり、作業開始です。



数人は、教えてもらった方法以外で自分のイメージの表現を試みられていました。糸や輪ゴムで布を縛って模様をつける“しぼり”や、折り紙のように布を折ってから板で強く締め、板の部分以外を染め上げる“板締め”、染めたくない部分に蝋をつけて染める“ろうけつ染め”、網の中に丸めて入れ、その染めムラを楽しむ“群雲染め”、漬ける時間を調節するグラデーションと、模様だけでも5種類になり出来上がりが楽しみです。



皆さん始めは緊張気味でしたが、藤本さんからコツを教わりながら作業を重ねるうちだんだん作品に真剣になっていきました。

藍の染料は生き物なので、甕（かめ）の具合の調節が難しいところです。空気が入らないよう注意しながら布を液に浸します。一分ほどじっとしておくのは以外に忍耐がいりました。そうして浸し終わるとすぐに空気にさらします。



甕を傷めないよう、染める回数を調節しながらそれぞれ好きな濃さに仕上げます。この時点ではまだ自分の模様の出来がわかりません。不安と期待が入り混じります。

納得のいくまで液でそめたら、次は水にさらします。



しぼりや板締めはまず糸や板を外します。  
広げるとついに模様が見えました！

濃い藍色がタライに広がります。さらし終わり、布をひろげてみるとアクが抜け冴え渡った藍色にぱっと変化しました。この瞬間お一人お一人から驚きの声が上がります。最後に酸化を止める液に浸して完成です。



完成した作品を干して乾かします。





藤本さんご夫妻が寒天をつくって下さっていました。皆で頂きながらそれぞれ出来上がったばかりのスカーフを手になさな発表会を開きました。「出来上がりの意外性が楽しい」「子供の頃に帰ったように熱中しました。」「出来上がりを見ると自分の手を抜いた所がよくわかる。」「出来上がりに満足！」とのこと。講座を通じて日本特有の伝統技法の良さ、おもしろさを感じていただけたようです。



この講座の主旨は、“すくも”を使った日本の藍染めを知るとともに、自ら染める作業を楽しんでいただくことでした。いろんな模様の出来るおもしろさや、染料に浸けるたび濃くなり空気や水にふれたとたん冴え渡る本物の藍色を手元で見える事、またそれを身に着ける事で、伝統工芸品を身近に感じることができます。講座終了後に、藤本さんの自宅にある藍染めの衣服や鞆を見せていただいていた方もおられ、藍染めをしっかりと堪能した一日になりました。

(記録 小山)

以上